日本キリスト教会　広島長束教会だより

ミニバラ No.54

〒731-0135　広島市安佐南区長束 3-32-16

TEL/FAX
082-238-3459

2016 年 11 月発行

知　恵　の　探　究

知恵が深まれば悩みも深まり、知識が増せば痛みも増す。

（コヘレトの言葉１章 18 節）

「人生不可解なり」という言葉があります。コヘレトは不可解としか思えない人生に意味を見出そうと、この世界に起こることの一切を知ろうと努めました。しかしそれは大変な仕事で、自ら志したとはいえ苦しみに満ちたことでありました。

紀元前６世紀に生きた中国の思想家、老子は「学を絶たば憂い無からん」と説いています。これは「勉強するな、そうすれば思いわずらうことはなかろう」ということで、奇しくもコヘレトの言葉とよく似ています。確かに本など読まず、何も考えることがなければ、人間は幸せで、社会ももっと平和で、楽しいものとなるのかもしれません。

しかし人間はたいがいの場合、小さい時からいやでも勉強しなければなりません。その中でも、コヘレトは一大決心をして、世界に起こることすべて知ろうと熱心に探究し、知恵を尽くして調べたのですが、その結果は、「どれもみな空しく、風を追うようなことであった。」コヘレトがどんなに学び、考えてみてもどれも空しかった、不可解な人生の意味を解くことは出来なかった、ということです。

コヘレトにはもともと「なんという空しさ、なんという空しさ、すべては空しい」という問題意識があって、そこから、空しくないものを求めて探究を始めたのですが、知恵と知識をいくら極めても空しさを克服する道は見つかりません。いくら努力したからと言っても、彼の悩みを解決することは出来なかったのです。こうしてコヘレトは知恵と知識の探究に見切りをつけるのですが、さて私たちもこれに習って、勉強はもういい、知恵と知識の習得に意味はないという結論になるでしょうか。実はそうではありません。

私たちにはコヘレトの知らなかったもの、新約聖書の教えが与えられています。「自分は何か知っていると思う人がいたら、その人は知らねばならぬことをまだ知らないのです」（第一コリント書８：２）。

これは、「わたしは太陽の下に起こることをすべて見極めた」と言っているコヘレトの知らなかったことでありました。どんなに学問をきわめた人であっても、知らないことがあります。多くの一流の学者が言っているように、深く見極めたというその先に、さらに大きな謎が広がっているのです。

神のなされることが人間には愚かに見えたとしても、神はどんなに知恵のある人よりはるかに賢いのです。しかしそのことは人間にとって悔しく、嘆かわしいことではありません。かえって大いに喜ぶべきことなのです。

人間がどんなに知恵をふりしぼっても、神のおられるところにたどりつくことは出来ません。神様抜きの人間の知的な活動がある程度のことをなしとげることが出来たとしても、結局は堂々巡りになるか、破局を招くものとなるでしょう。しかし神の内にある本当の知恵や知識を求めてゆくとき、コヘレトの陥った空しさの底を突き抜けることが出来るのです。「神によってあなたがたはキリスト・イエスに結ばれ、このキリストは、わたしたちにとって神の知恵となり、義と聖と贖いとなられたのです」。（第一コリント書１：30）

コヘレトは「すべては空しい」と言いますが、キリストは空しさのきわみを生きられたのです。「人生は不可解なり」と言いますが、キリストの人生こそ不可解そのもの、その究極の姿ではないでしょうか。しかしキリストは勝利されました。死で終わってしまう人生に、死をもってしても終わらない命を注入なさいました。それは、キリストにあって知恵と知識は滅びないということです。

いま知恵と知識を深く見極めることとは、私たちにとってキリストを知ることです。そこに立ってみる時、人間の知的活動と、これに向けてのけんめいな努力も決して空しいものとはなりません。

（2016 年９月 18 日の礼拝説教より）

牧師　井上　豊